

野外運動研究室ニュースレター

編集：筑波大学野外運動研究室広報係
発行：筑波大学体育科学系野外運動研究室
〒305-8574 つくば市天王台1-1-1
TEL/FAX 029-853-2729

【巻頭言】

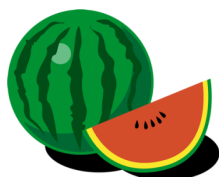
野外運動研究室のOB・OGとの繋がり

井村 仁

体験の夏休みが終わり、勉強に最適な2学期が始まりました。夏休み中に体験した様々なことを基礎に、そこで疑問に感じたことや興味をもったことについて、この秋じっくりと取り組んで下さい。

さて、若い学生の皆さんは、facebookというものを知っているだろうし、利用している人も多いかもしれません。私も、ちょっとしたきっかけでfacebook利用者の仲間入りをしました（但し情報発信はせずに時々、仲間からのメールを確認する程度）。6月の私の誕生日には、今までの人生の中で最も多くの方から誕生日のお祝いの言葉を頂きました。私が利用しているグループは、野外運動・野外教育関係者が投稿してくるグループです。野外運動関係の職業に就かれた方やIT産業で活動している方など、様々な分野で活躍されている研究室OB・OGの様子わかります。学生の皆さんも、野外運動研究室のOB・OGともっと交流を持ちたいと思いませんか。野外運動研究室に在籍している学生の皆さんの財産は、研究室内にあるものだけではなく、今までの歴史の中にもたくさんの財産があるのです。定期的に、OB・OGを招いて交流の場を設けるのも素晴らしいことではないでしょうか。10月には、筑波大学で日本野外教育学会大会が開催されますので、研究室のOB・OGをはじめ、多くの野外関係者と交流できる絶好の機会となります。

学生の皆さんは、このような恵まれた環境を最大限に活用して、自分を大きく成長させてもらいたいと思います。



【研究室関連授業（2学期）／研究室連絡】

○学群関連科目

- ・海洋スポーツ
- ・野外運動方法論演習Ⅳ
- ・野外運動方法論Ⅱ（水辺）
- ・実技理論・実習（野外運動）

○大学院関連授業

- ・野外教育・スポーツ基礎理論
- ・野外運動論演習（通年）
- ・野外教育・スポーツ評価・研究法2
- ・野外教育・スポーツ実習Ⅳ（セラピューティック）

【授業関連報告】

○UG キャンプ実習

鶴木 優輝（UG3）

2011年7月22日から27日にかけて、新潟県妙高市でキャンプ実習が行われた。地震の影響などで例年の実習地から変わり、初めての妙高ということで手探りの状態から始まった。この実習には、UG3年からは鶴木、福塚、山川の3人が、UG4年から岩谷さんが参加し、TAとして久米さんについていただき、仁先生の指導のもとで進んでいった。実習では、小濁地区というところにベースキャンプを張らせていただき、様々な形で地域の方々に手助けをしていただいた。地域の方々の協力がなければ、この実習は成功しなかったかもしれないと思う。また、参加した6人の「絆」はかなり深まったと思う。足りないものをそれぞれが補い合い、全員で協力して問題を解決していった。まあ、問題というのも筐に尽きるところが・・・(笑)。こうしてみると、最初の実習ということで改善点も多くあったが、それ以上に得たものは大きかったと思う。この経験を、これからの実習や生活に活かしていきたい。



○MC 水辺実習

日比野 功宜 (MC1)

7月11日～15日にかけて野外教育・スポーツ実習Ⅱ（水辺）が沖縄本島で行われた。野外運動研究室の大学院3名、久米、清水、日比野が参加した。筑波大学から吉田先生、沖縄キリスト教短期大学からは本研究室のOBである張本先生が担当教員として参加して下さった。今回の実習が私たち大学院生3名にとって初めてののものであった。まず、一般的に「沖縄」と聞くと、世界でも有数のきれいな海をもち、自然豊かな日本の代表的な観光地というイメージがあると思われる。しかし、今回の実習では沖縄の現況を知ることによって、大自然はもちろんのこと、普段は見えにくい沖縄の影の部分というものも勉強するいい機会となった。沖縄の現状をもこの目で見て、肌で感じて体感することが出来た。また、沖縄の抱えている基地問題についても考える機会も得ることが出来た。沖縄の魅力を再確認することが出来た実習となった。

○MC キャンプ実習

清水 啓一 (MC1)

7月29日（金）～8月4日（木）に野外研の院生を対象にMCキャンプ実習が行われた。プログラム内容は、MTB グループラン、ロッククライミング、南アルプス縦走登山であった。前半は静岡県立朝霧野外活動センターをベースに設営や野外炊事などの基本的なキャンプ技術が試されることとなった。振り返ってみれば、私は自分がキャンパーとして本格的なキャンプに参加するのはこれが初めてであった。実技理論実習のTAとしてデイキャンプなどに関わってはいたものの、実際に自分がキャンパーとなって活動してみると、いろいろと苦労することも多かったが、その何倍もキャンプを楽しむことができた。また、実習を通して、4月に入学してからこれまでに得た知識や技

術を、実践のなかで確かなものにしていくいい機会でもあった。

実習の最後に行われた3泊4日南アルプス縦走登山は、時程の変更などもあり1日平均12、3時間の移動が必要となる過酷なルートであった。手つかずの自然が残る南アルプスの険しさに翻弄されながら、それぞれが自分と向き合いながら歩を進め、なんとか無事に予定のルートを消化することができた。

実習を終え、今回の経験が院生3名それぞれに大きな課題与えたと感じている。与えられた課題に対し、各人がどのように対峙していくのか、渦中の一人として、いろいろなことを考えさせられた夏であった。



【課外活動関連報】

○藤村女子高等学校キャンプ実習

大竹 崇 (UG4)

2011年7月4日～8日まで、藤村女子高等学校のキャンプにインストラクターとして参加した。参加者は、久米、日比野、清水、梶田、沖田、大竹、岩谷、中川の8名であった。例年よりも人数も少なく、経験者も少ないことから、一人一人の負担や不安は大きかったが、キャンパー全員に大きな怪我もなく、無事に帰ることが出来た。ただ、一班が登山の途中で迷子になり、梶田の活躍で発見することができましたが、反省点も多く、来年に向けた課題となった。全体を通して、僕や他のカウンセラーにとっても生徒にとっても、非常に大切な思い出になったことと思う。

○旅キャンプ

清水 啓一 (MC1)

『旅キャンプ-Road to Self-』のメインキャンプが8月11日（木）～28日（日）に行なわれた。このキャンプの目的は、悩みを抱える青少年を対象に、長期の自然生活体験や冒険体験を契機

として、悩みの改善を図ることやよりよく成長できるように支援することである。メインキャンプのプログラム内容は、つくばから富士山までマウンテンバイクでのグループラン、沢登り、カヌー、ロッククライミング、そしてメインプログラムである1泊2日の富士登山となっていた。今年度の参加者は2名で、そこにスタッフ5名が加わり計7名で行われた。中高生の参加者にとっては、フィジカル・メンタルともに相当な負荷となる旅であるが、一つ一つのプログラムにチャレンジしながら、それぞれが抱える課題と向き合っていく。

まさに満身創痍といった状況の中で行われた富士登山では、参加者の一人が自らの限界を悟り、下山の意思を示した。先に進むメンバーとの別れ際、それまでずっと共に旅をした仲間に見守られながら「みんなとここまで登れてよかった。」と笑顔で語った彼の顔が忘れられない。

スタッフとして初めて長期のキャンプに参加し、子どもたちからたくさんのことを学ばせてもらった。参加者の2人にとっても、この旅が何かしら人生を豊かにするきっかけとなることを祈るばかりである。

リレーコラム～OB・OGからのメッセージ～

「野外教育の成果を多方面にアピールしよう」



大阪国際大学人間科学部スポーツ行動学科

高見 彰 さん

未曾有の東日本大震災が起きてちょうど半年が過ぎた。亡くなられた方々や大きな被害を受けた方々に心より哀悼の意を表します。

私は野外活動（教育）が、学校教育や人間教育の分野のみならず、「社会的関心事」にもっと入り込むことによって社会的なポジションをつかめないかと強く思うようになってきている一例として、最近世界の各地で頻発する大地震が引き起こす津波、洪水や異常気象による豪雪、豪雨などにより深刻な被害がもたらされるにつけ、世界規模での防災意識が高まりが見られる。

神戸、中越震災の時と同じように今回の東日本大震災でも野外活動に携わっている多くのボランティア諸氏がいち早く現場に入り支援活動を行ったことは、ネットの情報からも伝わってくる。私が被災した阪神大震災のときの経験から、同じボランティアの中でも「キャンプの指導者はひと味ちがう」と大きな手応えを感じることができたものだ。避難所支援についても、キャンプ関係者はディレクターを中心に各係分担が明確にされ、組織的に動くことができ、一人一人の動きにムリ、ムダ、ムラがなく、一つの組織でまかないきれない部分は、そのネットワークを最大限に利用することができる。なんといっても個人の資質、モラルの高さが秀でている。廃材を使って焚火をたく、大鍋を使って炊事する、テントを張ったり、ビニールシートを使ってタープを張る、大勢の人を整然とさばく、ゴミの処理など衛生面の工夫など日頃のキャンプでは当たり前前の技術が、緊急時にどれだけ大きな力となることか。目の前に資材があってもうまく使えないというボランティアが多い中、キャンプで培われた関係者の動きは、被災住民の目にも輝いて見えたことと思う。さらに、対人関係においても常日頃、参加者の個性、立場を大事にすることを心がけているが、ここでも身体的にも精神的にも傷ついた被災者一人一人の気持ちを大事にした言葉がけや態度は、キャンプカウンセラーとして身につけている対人関係スキルだ。まさしく私たちが「防災」という分野に十分にアピールできることを証明している。

野外運動研究室の後輩のみなさんは、近い将来、教育現場で身を立てていこうと考えている人がほとんどだと思う。キャンプや野外活動がもたらす果実（教育効果）は、まだまだ学校教育を中心とした文科省の手中の範囲でしか食されていないのではないだろうか。私たちは社会に対してその立場をアピールしていくための道具（知識、スキル、資質など）を持っている。野外活動、野外教育が社会の中で根付いていくためには単一的な教育活動の一環としての見方だけでなく、今の社会が大きな関心を寄せているトピックにもっと積極的に関わっていき、野外活動が社会の中でさらに認知され、生活の中に無くてはならない存在となるまで、多様な研究視点を持ち、研究成果を蓄積してアピールしていく必要があると思う。

○東京家政学院大学 キャンプ実習

久米 あゆみ (MC1)

8月29日(月)～9月2日(金)に東京家政学院大学の健康・スポーツ演習「キャンプ」が長野県国立信州高遠少年自然の家で実施された。この実習は本研究室のOBであり、現在もスキー実習等でご指導いただいている金子和正先生がキャンプ長を務めるキャンプである。私は今回食糧兼装備スタッフとして参加させてもらった。

参加学生は31名いたが、ほとんどの人がキャンプ経験がなく、1日目のテント設営から悪戦苦闘していた様子であった。2日目はイニシアティブゲームに取り組み、目隠しをして感覚を研ぎ澄ませ様々なゲームにチャレンジした。3日目は1時間ほど山中を歩いたところにある「千代田湖」でビバークを行った。日が暮れかかった頃、雨の降るなか千代田湖を目指して歩き、ブルーシートのシェルターで夜を明かした。4日目のパーティーでは班ごとにアイデア溢れる料理を作り、にぎやかな雰囲気の中で過ぎゆく時を惜しみつつ、最後はランタンの灯りを囲んでキャンプをふりかえった。

今回の実習を通して、筑波では学べないことをいろいろ学ばせていただいたと同時に、私はキャンプというものの魅力を再認識した。もちろん全てを一言では語れないが、特に強く感じたのは、キャンプというものが様々な形の「出会い」によって織り成されているということだ。野外研には素晴らしい先輩方がたくさんいて、求めれば多くの経験の機会を得ることができる。ぜひ興味がある人は、どんどん外へのつながりを広げてほしい。新しい世界がそこには広がっているはずだ。

最後になりましたが、金子先生をはじめこのような貴重な機会を与えてくださった先生方や先輩方に感謝いたします。ありがとうございました。

【課外活動関連告知】

- 日本野外教育学会第14回大会
期間：2011年10月21日～23日
場所：筑波大学
- 森のようちえん全国交流フォーラム
期間：2011年10月28日～30日
場所：国立妙高青少年自然の家
- キャンプフェスタ 富士・朝霧
期間：2011年9月22日～25日
場所：静岡県立朝霧野外活動センター
- 日本体育学会第62回大会
期間：2011年9月25日～27日
場所：鹿屋体育大学

【スタッフ募集】

- 実技理論実習 ASE
日時：9月30日
定員：
- デイキャンプ
日時：10月26日～27日
定員：

【編集後記】

長かった(?)夏休みももう終わり。皆さんは野外研の室員としてどのような時間を過ごしたでしょうか。室員の活動報告を読み、お互いの刺激にしてもらえたらと思います。そして2学期からも研究室を盛り上げていきましょう!!

(広報担当 清水啓一)